

従って西郷の場合でも、上士の家に生まれ、  
あるいは出自はよくなくても、  
なにかの運で若すぎるうちに  
エリートコースに乗っていれば  
自分の思い描いた政策などを  
浅い段階で実施できてしまい、  
いわゆる参謀にはなれても、  
維新回天などという  
どでかい仕事のできる人間まで  
ゆきつけなかったのではないか。

現に、あの有弁多才で  
個体能力抜群だった一橋慶喜でさえ、  
殿様特有の人間音痴が災いして  
土壇場の難局を乗り切れなかった。

さらに、自分がこだわる“年齢”の話をすれば、

貧乏な下役人の子に生まれ、  
若年の頃から志を持ち、  
下々の生活に触れながら  
下積みを経験し達した28歳、  
若すぎれば才が勝ち尖ってしまうくらいがあるし、  
これ以上年を経ってしまうと、  
とうが立ち、腐ってしまいそうなぎりぎりの年である。

**機が熟し切った時、  
最高の師匠斉彬と出会えた。  
まさに、好奇心が恋に変わり、  
長い間恋こがれて悶々としていた時、  
相手が靡いてくれたようなものであろう。**

西郷が一気に開花した理由はそれであり、  
斉彬の懐刀として活動した4年間は、  
第一段階の大きな成長期、

思想的な拡がりと共に、  
ハイレベルな交渉力、  
実行力という、  
実務的な政治技術を西郷に付加した貴重な期間であった。